

パネルディスカッション「日露戦争はどう語られてきたか～明治末・満州・再生～」

日露戦争イメージの再生産 ——女性雑誌を中心に——

芳賀祥子*

1. はじめに

出来事は一回限りでも、そのイメージ・物語は何度でも再生産される。史実の都合のいい部分のみ取り上げたり、事実を歪曲して過剰な意味を付与したり、再生産されるイメージには、あやしげな尾ひれがつきものである。しかし、時にその尾ひれにこそ、時代やメディアを逆照射するものが含まれている。

千葉功^(注1)は、日露戦争における「神話」がどう再生産されるか検証し、「フィクションを掲げる歴史小説に対して実証的でないと批判」するよりも「時代的限界性」や「日露戦争観の変遷」の中での「位置づけ」を考えるべきとし、「日露戦争観は時代の産物そのものなのである」と述べている。

本稿では、これを受けて、日露戦争のイメージが女性雑誌の中でどのように再生産されたのか検討してゆきたい。そもそも、女性ジェンダーと「戦争」は相性が悪い。上野千鶴子^(注2)が指摘するように、「[国民]が男性性をもとに定義されているとき」、「総動員体制」と「性別領域指定」のディレンマ^(注3)が生まれる。これを解消するためには、女子徴用を行うなど「参加型」の形をとるか、あくまでもジェンダー分離を崩すことなく「分離型」を貫くか、二択となるが、日本はあくまでも「分離型」の形を通し、「軍国の母」や「従軍看護婦」といった女性ジェンダーの中での国民化を促

した。女性雑誌の中では、このようなジレンマがどのような形で表れ、どのように戦争が語られてゆくのか。日露戦争を語り直す「尾ひれ」の中に、そのジレンマや葛藤は反映しているはずである。

本稿では、「多くの発行部数を誇ったという点において」「本格的な商業誌として成功した女性雑誌だった」^(注3)とされる『女学世界』や、徹底的な実用性で圧倒的な支持を得た『主婦之友』をはじめ、『婦人公論』、『婦人画報』等の雑誌を中心に、「日露戦争」のイメージが開戦時からどのように語られたのか分析する。日露戦争が収束した後から、日中戦争、太平洋戦争と、イメージの変遷を追うことで、女性に向けて戦争イメージを再生産することの意味を考えたい。

2. 日露開戦——限定的な戦争協力あるいは反戦

『主婦之友』『婦人公論』といった主な女性雑誌は、大正以降に創刊されているため、日露開戦時の記事は、明治34（1901）年発刊の『女学世界』を中心に見ていく。

まず、日露戦争が始まった明治37（1904）年の4月号では、「時局と家庭」という特集が生まれ、旭日旗、桜、波文様といった「日本」的なモチーフを使用した扉絵がついている。この特集では、「赤十字社の準備」「看護婦の義挙」「コサツク兵の生活」「日本と露西亜（実力比較表）」「出征軍人の家庭」「ナイチンゲールの事蹟」といった記事が並び、「敵」であるロシアの情報を紹介するとともに、女性の戦争への貢献として「看護

*お茶の水女子大学大学院院生

婦」というあり方をクローズアップしている。「看護婦」は、ケア労働という女性の性別役割に合致する限定的な戦争参加の方法であり、これが女性雑誌で大々的に取り上げられるのはよくわかる。この次号も、表紙には、桜と波文様を背景にした看護婦の帽子が描かれており、戦争に積極的に参加する女性が看護婦のイメージに集約していることが窺える。

また、記事の中では、戦時の女性の心構えを、「此の勁敵を相手にして戦はんとする日本軍の覚悟は蓋し非常のものならざるべからず。然かも戦争は単に軍隊、兵士の戦争にあらずして、国民全体の戦争なり、畜に男子壮丁の戦争にあらずして婦人小児も又戦争に対するの一大覚悟なかるべからず」と語り、具体的に必要なこととして「後顧の憂なからしむる覚悟」、「平素節儉」、「恤兵」（戦地に物を送って兵士を慰問すること）、「出征軍人の留守宅を見舞」「寂寥を慰藉する」ことを挙げている^(注4)。ここでもやはり、「一大覚悟」が必要としながらも、女性の戦争参加は「ケア」の分野にとどまっている。

このような女性とケアの親和性は、「国家の為めと云ふ犠牲的の観念は結構だが、それか為に美しい家庭の楽しみを犠牲にしなければならぬやうな社会は、決して完全なる社会と云ふ事は出来ぬ。我々の希望はこの家庭の楽しみを犠牲にしない新社会を実現させたい、即ち戦争のない世の中が欲しい」、「婦人はまづ戦争が其一身の上に如何に影響し来るかを吟味せよ、而して、戦争の為に力を尽すよりは、却つて世界の平和の為に尽す所あるを要す。」^(注5)といったような反戦論も繋がる。「分離型」の「国民化」は、その分断ゆえに、男性ジェンダー的な「戦争」の在り方を相対化する視点も持ち得たのである。

3. 明治末～大正期の「日露戦争」

このような戦争をめぐる亀裂は、日露戦争が終

決した後の誌面においても見る事ができる。明治末～大正期の女性雑誌においては、直接的に日露戦争が語られるわけではないが、日露戦争において活躍した軍人の家庭や、戦争と家庭の関係が語られることで、間接的にイメージが立ち上がる。

ここで最も多く誌面を賑わせるのは、陸軍大将・乃木希典の家庭であろう。例えば、『婦人画報』創刊時（明38（1905））には、夫人である乃木静子が二度誌面に登場し、「乃木へ嫁きます砌、斯う申されました。「軍人へ嫁入りするのであるから、何時何ういふことがあるか解らぬ。何時も非常の事のあつた砌の覚悟をして居なければならぬ。」と」、「乃木は厳格な気質で御座いますから、「軍人の家では、何時も戦時の心掛けをして居なければならぬ。」と斯う申し渡されたので御座います。」など、軍人の家庭の心構えが語られる^(注6)。質素儉約を説くときも、「乃木大将夫人は常に羽二重の白襟に紬の黒紋附を礼服にされて居つたと聞かすが、陸軍大将夫人がこの服装にとどまつてをつたといふことはその事だけでも慕はしい心地もいたします。乃木大将夫人のやうなお美しい心をもつて、そしてこんな質素な服装であらつやるとしたら、其の礼服のお姿がどんなに気高く見られるであらう。」といったように、乃木家が参照される^(注7)。

このように何かと模範として称揚される乃木家だが、これが大正元（1912）年明治天皇の死に殉じて自刃する段になると、常人には真似できない境地として神聖視されるようになる。『女学世界』の特集「現代婦人の一大刺激 乃木大将夫人の自刃に就て」^(注8)では、「…其健気な心掛けは実に日本婦人の精華で人の妻として誠に見上げた行ひであると信じます。単に士気振作婦道矯正の上から見ても大将夫妻の自殺は日に軽薄に流れんとする今日の子らに向つて無限の教訓を与ふるものと思ひます。」（榎橋絢子談）という賛美がある一方で、「若し此を真似る人があるとするならば実に立派な者ですが、迎もよくする人は御座いま

せん。」(三輪田真佐子談)、「美しい事が実に忠君愛国の花です。けれど文明の今日決して奨励する事は出来ません。」(矢島楯子談)といったように真似のできない特殊なケースとして語られてゆく。ここに来て、見習うべき模範的なものとして語られていた軍人一家のモデルケースは、手の届かない模倣不可能なものになってしまうのである。

これは、「日露戦役後」「昨日までチャホヤされた兵隊が、忽ち鼻つまみ者として指弾されるに至った例は枚挙に遑がない」という事実とも表裏をなすだろう^(註9)。軍人の家庭は模範とされる一方で近づきたい遠い存在、日常的ではないものになってゆく。

むしろ、一般の家庭が目指すべきは平和であり、大正11(1922)年『婦人公論』では、次のような言説も生まれてくる^(註10)

世界の婦人が心から戦争を憎むならば戦争は起りません。…子供に玩具の剣と鉄砲とを持たせ、陸軍大将になるのを何よりの目的とさせる教育は、家庭で将来の戦争を宣伝してゐるやうなものです。軍国主義的無自覚な家庭教育を捨て、母親が真に全人類に対する愛を其子供に植えるならば世界の平和は、必ず実現されると思ひます。

「軍人」を称揚する風潮を一刀両断し、戦争防止のための家庭の重要性を説いている。このように、女性雑誌においては、家庭をめぐる、英雄たる軍人を輩出する基盤という側面と、平和を担う基礎という側面と二つのイメージが付与されることになるのである。

4. 日中戦争下におけるイメージの利用

しかし、これが日中戦争に入り、昭12(1937)年の国民精神総動員実施要綱をはじめ、翌年の国家総動員法、新聞用紙供給制限令、「婦人雑誌二対スル取締方針」(内務省警保局)など、メディアへの統制と共に、メディアの自粛が進むように

なると、「日露戦争」のイメージはもう一度転換することとなる。

雑誌の統廃合が進むなか戦中も雑誌を発行し続けた『主婦之友』を中心にしてみよう。日常から遠ざかっていた軍人のイメージは、再び見習うべき模範として存在感を取り戻す。例えば、口絵に「東郷元帥の銅像」が使用され、「非常時日本の守護神として、また国民思想教化の好資料として、進んで一家に一台を備へられんことを!!」^(註11)という言葉が添えられたり、日露戦争における軍人の活躍が「何十万といふ軍人さん方が、あのととき身命を擲つて、日本の人柱に立つてくださったればこそ、日本は今日の地位を得、満州の地にも、安心して同朋が活躍できるのであります。」と熱を持って語られたりするようになるのである^(註12)。

また、日露戦争における傷痍軍人を「偉大なる先達」^(註13)として美談仕立てで語る記事も目立つ。その際、「日露戦争当時は、先の満州事変や今度の支那事変のやうに、国家の行き届いた救護施設や、村民の暖かな慰問なども、それほど徹底してをりませんでした。そのうへ、三十七、八年の兩年に亙つて、非常な凶作でしたので、自分達の生活に追はれてゐる人達には、国家のための名譽の戦傷者さへも、温く慰めるだけの余裕がありませんでした。」^(註14)といったように、ことさら日露戦争の苦勞を語ることで、士気を高め現実(日中戦争下)の苦難に目をつぶらせる効果ももたらしめている。

これは、「得猪海軍中佐母堂と西住戦車長母堂が 良人と愛児を御国に捧げた軍国譽れの母御弔問」(『主婦之友』1939・9)といった夫や子を日露戦争で失った女性の顕彰記事においても同じであろう。

前節まで見たような戦争をめぐる二面性は影をひそめ、日露戦争は、苦難の中で戦い抜いた栄光の戦争として単一のイメージに回収されてゆく。さらに戦局が進み、太平洋戦争に突入すると、今度は「大東亜戦争と日露戦争」(『婦人画報』

1944・3)のように、広い世界と戦うための参考例として召喚されることもある。

日露戦争当時は、ケアの領域でごく限定的な社会参加にとどまっていた戦争との関わりが、女性全体に向けて、積極的に「大君のため、み国のためと、涙深く秘して家業に励み、愛児の遺せし孫の養育に力を注がれる母——これぞ軍国日本の誉れ」^(注15)となるよう促されてゆくのである。こうして、「日露戦争」をめぐるイメージは、苦難を忍び、戦争への意識を高める役割を担い、主体的な戦争参加のための物語として利用されていくのである。

5. 終わりに——現代における日露戦争の「消費」

これまで見て来たように、女性雑誌における「日露戦争」は、目まぐるしくそのイメージと役割を変えている。最初のごく限定的な戦争参加を促していたものが、見習うべき軍人の家庭として広がりを持ってゆく。しかし、一方で、乃木静子に見られるように過剰な規範意識は模倣不可能な特殊な存在という側面も持ち、むしろ、平和こそ女性を中心になって家庭で求めるべきものという論も出てくる。こうした女性・家庭と戦争をめぐる二極化は、日中戦争という新たな戦争によって、再び様相を変え、「日露戦争」は参照し見習うべき「戦争」として表象されてゆく。「日露戦争」がいかに過酷であったかを語ることで、士気を高め、多少の困難には目をつぶらせ、主体的な戦争参加を促すようになる。

「女性」と「戦争」の間にジレンマと分離があるからこそ、短期間で顕著な変化を見せ、時代時代で女性に要請されるものを浮き彫りにするのである。

では、現代はどうだろうか。近年、ゲームやアニメ、漫画といったサブカルチャーの領域で、日露戦争を目にすることがある。例えば、「らいむいろ戦奇譚～明治日本、乙女防人す。」(2002・12

ゲーム、後2003・1～3アニメ化)、「旭日ニ戀露ス」(女性向け恋愛アドベンチャーゲーム 2013・8)、「艦隊これくしょん 艦これ」(2013・4 オンラインゲーム、後2015・1～アニメ化)など、いずれも戦争を虚構化した作品である。ここには、まず、戦争がゲーム化し遊ぶことができるほど、距離のある存在になったという事実を指摘することができるだろう。デフォルメの効いた絵は、悲慘さやリアリティを稀釈し、戦争を矮小化して親しみやすいものにする。加えて、主体的な戦闘が重視されていないという点も興味深い。戦争のゲーム化と言えば、真っ先に戦闘機を操り敵機を撃ち落とすシューティングが思いつくが、これらのゲームは、クイズやキャラクターの育成・鑑賞がメインであり、主体的な戦いは脱落している。ここに、単純なナショナリズムや右傾化とは異なる、強い遊戯性・距離感・浮遊性を感じるのである。

日露戦争イメージの中に、「女性」と「戦争」の間のジレンマや葛藤が反映されていたように、この現在のサブカルチャーにおける距離・浮遊感の中にも「若者」と「戦争」あるいは「国家」の乖離・葛藤が忍び込んでいるのではないかと類推されるが、この点は、今後の課題としたい。

注

注1 千葉功「日露戦争の「神話」」(小風秀雄編『日本の時代史23 アジアの帝国国家』吉川弘文館 2004)

注2 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』(青土社 1998)

注3 小山静子「女学世界【明治期復刻版】解題」(柏書房 2005)

注4 「日露の事局と家庭 戦争と婦人の公共心」(『女学世界』1904・4)

注5 幸徳秋水「婦人と戦争」(『家庭雑誌』1904・3)

注6 乃木静子「何時も戦時の心がけ」(特集・暑中と我家庭)(『婦人画報』1905・8)

注7 宮田修「経済生活から見た衣服問題」(『主婦之友』(1917・9)

注8 『女学世界』1912・10

注9 高倉徹一編『田中義一伝記 上』(原書房

1958 (復刻1981)、参考) 原田敬一『国民軍の神話 兵士になるということ』(吉川弘文館 2001)。なお、女性雑誌においても、日露戦争後は軍人の誉れが高く鼻高々で結婚したものの、その後軍人として出世できず、次第に暴力的になっていく夫に悩まされているという体験談が語られている。(黒頭巾「常世妻君小言(一)(1)陸軍大尉の妻」『女学世界』1908・12)

注10 稲垣守克「戦争防止のために」(特集・今後婦人の行くべき道) (『婦人公論』1922・11)

注11 『主婦之友』1934・8

注12 「名誉の戦死者の母や妻に間宮老大師の慈悲の御法話」(『主婦之友』1937・9)

注13 「戦争で不具になつた勇士夫妻の成功美談 関西傷痕軍人の父・後藤藤松氏の苦闘の半生」(『主婦之友』1938・2)

注14 「右足を失つた貧しい戦傷者と結婚して幸福な家庭を築き上げた体験」(『主婦之友』1938・7)

注15 「得猪海軍中佐母堂と西住戦車長母堂が 良人と愛児を御国に捧げた軍国誉れの母御弔問」(『主婦之友』1939・9)